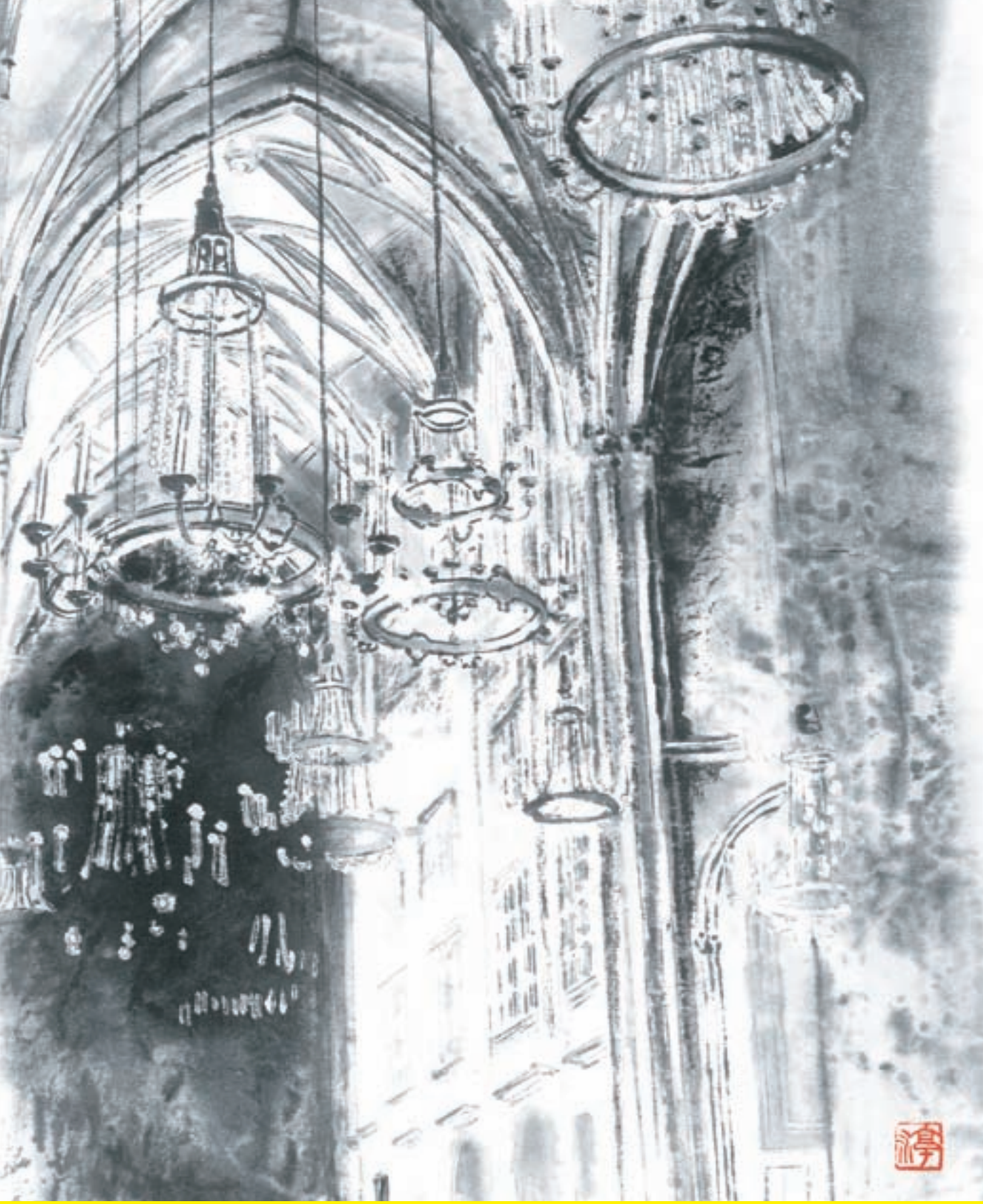


SYNTHESIS 2011

シンセシス

The Annual Report of the MGU Institute for Liberal Arts

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報 2011

INDEX

01 **研究所概要**……01

02 **研究所活動**……07

月例研究報告……08

ランゲージ・ラウンジ活動報告……14

03 **研究プロジェクト**……19

04 **研究業績**……33

01 研究所概要

2011年度
教養教育センター付属研究所概要

Ⅰ．組織

◆研究所運営委員会執行部

所長：石渡周二

主任：三角明子　渡辺祐子

研究部門運営委員：大森洋子　森田恭光

◆研究所所員

池上康夫　大森洋子　亀ヶ谷純一　黒川貞生　佐藤アヤ子　佐藤寧　嶋田彩司　鈴木義久
武光誠　名須川学　橋本肇　原田勝広　永野茂洋　森田恭光　寄川条路　猪瀬浩平
植木献　金珍娥　高木久夫　高桑光徳　張宏波　Varden, J. K.　原宏之　福山勝也　上野寛子
越智英輔　川島建太郎　北村文　鄭栄桓　Thornton, P.　太田和俊　土屋博嗣

◆研究所運営委員会（＊＝代表者）

・『SYNTHESIS』（年報）担当：＊石渡周二　＊大森洋子

Ⅱ．研究活動

1. 研究プロジェクト（＊＝代表者）

◆記憶メディアの比較文化的研究
　＊川島建太郎　佐藤アヤ子　高木久夫　原宏之

◆「教養教育としてのカフェ」研究：カフェネットワークの構築とその意義
　＊植木献　猪瀬浩平　三角明子　上野寛子

◆近現代日本におけるアジア系諸民族のネットワーク
　＊渡辺祐子　金珍娥　嶋田彩司　鄭栄桓

◆ Stretch-Shortening Cycle による筋肉出力増強のメカニズム
　＊黒川貞生　亀ヶ谷純一

◆青少年の身体的特性と健康状況に関する研究
　＊越智英輔　森田恭光

2. 研究報告会

日付	報告者	テーマ
第一回（12/14）	永野茂洋氏	「出エジプト記と政治」
第二回（1/11）	鈴木義久氏	「ハーマン・メルヴィルの『信用詐欺師』の主題について」
	三角明子氏	「チリ現代詩と先住民文化」

Ⅲ．教育活動

≪学内語学試験≫

	校舎	日付	受験者数	受験者合計
TOEIC IP 試験（※教養教育センターより委託業務）				
＜第一回＞	横浜	7/20（水）	61名	128名
	白金	7/23（土）	67名	
＜第二回＞	横浜	10/19（水）	96名	188名
	白金	10/22（土）	92名	
＜第三回＞	白金	12/17（土）	82名	179名
	横浜	12/21（水）	97名	
TOEFL ITP 試験（※教養教育センターより委託業務）				
＜第一回＞	横浜	6/29（水）	86名	
＜第二回＞	横浜	10/5（水）	109名	

≪講座≫

◆短期講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間（コマ数）	講師	受講者数
夏季 DELE 試験準備講座 ＜文法・語彙編＞	白金	10～13時	9/5～9 （10コマ）	仲道慎治氏	31名
夏季 DELE 試験準備講座 ＜実践編＞	白金	14～17時	9/1～7 （10コマ）	Eugenio Del Prado 氏	28名
春季 DELE 試験準備講座 ＜文法・語彙編＞	白金	10～13時	3/14～16、19、21 （10コマ）	仲道慎治氏	12名
春季 DELE 試験準備講座 ＜実践編＞	白金	14～17時	3/14～16、19、21 （10コマ）	Eugenio Del Prado 氏	8名
ドイツ語技能検定試験 4級対策講座	横浜	火4	9/27～ （7コマ）	柳橋大輔氏	3名
手話講座	白金	3・4	3/5～9 （10コマ）	荒木泉氏	35名

◆通年講座◆

講座名	校舎	曜時限	期間（コマ数）	講師	受講者数
DELE 試験準備講座	白金	水5	5/12～ （全26コマ）	Eugenio Del Prado 氏	約10名
ハングル能力検定試験 対策講座4級	白金	木4	5/12～ （全25コマ）	高槿旭氏	春：4名
ハングル能力検定試験 対策講座5級	横浜	水1	5/11～ （全26コマ）	李映子氏	春：1名 秋：1名
中国語コミュニケーション 検定試験講座	横浜	月4	5/9～ （全25コマ）	竹中佐英子氏	春：5～6名
ドイツ語3級検定講座	白金	木5	5/12～ （全25コマ）	小山田豊氏	春：5名

TOEIC 講座（※教養教育センターより委託業務）

講座名	校舎	曜時限	期間（コマ数）	講師	受講者数
＜試験対策講座＞ 春学期	白金	土3・4	6/4～ （全10コマ）	長谷川剛氏	22名
＜試験対策講座＞ 秋学期	白金	土3・4	11/12～ （全10コマ）	長谷川剛氏	25名
＜夏季集中特訓講座＞ 基礎コース	横浜	2・3	9/1～9 （全14コマ）	中村道生氏	34名
＜夏季集中特訓講座＞ 実践コース	白金	2・3	9/1～9 （全14コマ）	長谷川剛氏	25名
＜春季集中特訓講座＞ 基礎コース	横浜	2・3	2/13～21 （全14コマ）	中村道生氏	35名
＜春季集中特訓講座＞ 実践コース	白金	2・3	3/5～13 （全14コマ）	長谷川剛氏	25名

Ⅳ．その他

≪公開講演会≫

日付	講演者	タイトル
10月　5日（水）	兎洞武揚氏	「創造性を高める対話を体験しよう」
12月　5日（月）	井上史子氏	２週連続特別企画「大学における真のリア充を求めて」
1月　7日（土）	奥泉光氏	「記憶と虚構ー小説の方法をめぐって」
1月16日（月）	三角明子氏	「ワールドカフェを体験してみよう」
2月21日（火）	リチャード・キャベル氏	「グローバル・ヴィレッジを具象化して」

≪刊行物≫

・明治学院大学　教養教育センター付属研究所年報　『SYNTHESIS　2011』3月発行

02 研究所活動

月例研究報告

出エジプト記と政治

永野 茂洋

出エジプト記から申命記までの文書は、モーセの誕生から死にいたる時間を大枠としながら、イスラエル民族のエジプト脱出劇、シナイ山での律法の授与、荒野の放浪についての多様なエピソードと神学的思索を、モザイクのようにつなぎ合わせた複雑な構成を持つ歴史文学である。モーセは大小さまざまな単元を一つにつなぐ留め金のような役割を果たしており、その中のどれにモーセのオリジナルな形象があったのかを私たちはもはや確かめることができない。モーセはエジプト人を殺害した犯罪人であり、亡命者であり、故郷喪失者であり、帰還民であり、エジプト脱出運動の指導者、奇術的な不思議を行ったマジシャン、異教徒への宣教師、預言者、民の罪の執り成し手として登場する。神の代理人であると同時に、民の代表者であり、出エジプト記から申命記までを記録した書記でもある。モーセは「歴史的モーセ」である前に「文学的なモーセ」として私たちの前に姿を現す。

従来紀元前13世紀に想定されてきた出エジプトの出来事も、現在では、それをそのまま「歴史的な出来事」として理解することはほとんど不可能である。むしろ、エジプト脱出の出来事は、はるか後代の、おそらくは捕囚からの帰還と、その後のユダヤ教団時代の経験、思索を契機として仮構的に構成された、いわば「文学的な出来事」であった。断片的なテクスト形成の起点は、ユダ王国末期の可能性がまずは考えられるが、出エジプトという民族の「過去」の実質的な発見 / 創造は、アッシリア帝国の宗教文化政策と、それに追随したユダ王国の国家的・民族的あり方が相対化され、理想的な「民」についての文学的虚構がリアリティを持ち得た時代まで待たねばならなかっただろう。

抑圧的な政治経済システムを象徴する「エジプト」という国から被抑圧民（貧しくされた者たち）を解放するという出エジプト記の主題は、古代オリエントに見られる「貧しい者たちの救済」についての言説と比べてみると、それが国家に対する際立った相対化の視点の上に成り立っていることがわかる。

メソポタミアでは「貧しい者たち」の権利を守ることは王の義務であった（『ハンムラビ法典』の結びの言葉における負債免除政策についての王の自負の言葉など）。「貧しい者たち」が保護されるべきであるのは、太陽神が彼らを特に愛しているからであるという共通認識があった。エジプトにおいても富める者が「貧しい者たち」に施し、彼らを助けることは重要な徳目であった（たとえば『アニの教訓』）。しかし、旧約以前の古代オリエントでは、構造的に貧富の格差を生み出す社会システム自体が相対化されることはなかった。

太陽神は「貧しい者たち」に配慮する神であるが、同時に社会構造の永続性を補償する国家神として機能していた。「貧しい者たち」に対する富裕層・支配層の慈悲深さ、謙虚さの奨めは、貧困を生み出す社会の構造を結果的に強化し、安定させ、維持する機能を果たした。また、貧困を生み出す原因と構造をかえってわかりにくくする役割を果たした。「貧しい者たち」に配慮する神に対して、富裕層は自らを「貧しい者」として敬虔を装う。「貧しい者たち」から「貧しさ」が奪われ、貧困と社会的苦難を生み出す構造は覆い隠される。古代オリエントにおいてこの欺瞞に何ほどか気づいていた知者たちは、裕福であるよりは「貧しい」ほうがよいという自覚を深めた。

それに対して、出エジプト記は、身分の高い支配層・富裕者層（「ファラオ」によって象徴される）による底辺社会層に対する重労働、生存の抑圧、社会的緊張の高まりからその叙述を開始する。抑圧、貧困、生存権に対する脅威は、運命でも、神々の意志でも、個人の過ちの結果でもなく、「ファラオ」という国家システムによって、人為的にもたらされるという認識がここにはある。

ヤハウェは、モーセを通して「貧しくされた者たち」をエジプト社会の外へと連れ出す。貧困の苦しみを軽減するのではなく（つまり、貧困・抑圧を生み出すシステムを温存、再安定化させるのではなく）、そのようなシステムそのものから物理的に移動してしまうこと。この発想は古代オリエント世界には見られない旧約独特のものであった。

脱出までの出エジプト記の物語展開の複雑さは、編集者たちが国家の枠内での政治を相対化し、それを超えるヴィジョンとして「脱出」を思い描いていたことを物語る。編集者たちはエジプト脱出行を単純な物語にしなかった。それ以外の方法によって人々を救済する政治のあり方を物語の中に示し、それを一つひとつ否定しながら、「脱出」へといたった道筋を構成する。

出エジプト記2：1 ～ 10は、王室による慈善福祉事業としての「貧しい者たち」に対する配慮について記す。ファラオの娘は緊急避難的救済手段を提供する。それによってモーセは大量虐殺を生き延びることになる。この箇所は、国家による虐殺の歴史を記録すると同時に、産婆・モーセの母親・姉・王女らの市民的不服従と、慈善行為による個人救済の有効性と限界という問題を突きつける。

2:11 ～ 15では、モーセの急進的な直接行動（エジプト人労務監督殺害のテロリズム）による人々の解放というテーマが語られる。しかし、皮肉なことに、これは仲間からの反発と疑念により行き詰まる。抑圧された人々自身が、抑圧する社会の秩序と価値を深く身につけ、内面化しているところでは、急進的直接行動は孤立の運命をたどらざるをえない。「あなたは私たちをも殺すのか」という同朋のセリフは、モーセに関わりたくないという拒否反応と同時に、モーセは自分たちに対する未来の抑圧者になるのではないかという疑念を示唆する。抵抗運動における指導権争い、内部対立、離反、犯罪者としての指名手配、亡命。モーセのたどった前半生をそのような政治行動として見ることが可能である。

5:1 ～ 23、7:1 ～ 11:10では、亡命先から帰還後のモーセの反政府運動が詳細に語られて行く。モーセはアロンと共に、労組代表にように、政権（ファラオ）と折衝し、団交を重ねる。体制内での労働条件の改善のための試みであり、努力である。しかし、その結果は、「ファラオ」体制をより一層をかたくなにし、労働条件の悪化を招く。それはイスラエル人だけでなく、エジプト人の生活環境、自然環境にも災厄をもたらす最悪の結果となる。

エジプトからの「脱出」は、このような一連の政治行動と政治的改善のための努力が挫折した後の、抑圧の構造そのもののトータルな否定であり、それまでにない新しい政治世界の創造に向けた歩み出しであった。「貧困」が存在しない社会関係への脱出である。そして、そのための課題の一つが、新しい共同性を支えるルールとしての「律法」の共有であり、経済的利害関心を第一とする「エジプト」

的あり方からの誘惑の克服であった（16:3「エジプトでは肉のたくさん入った鍋とパンを食べられた」）。

出エジプト記を何からの「脱出」の物語と見るか。

ラテン・アメリカのカトリック教会は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおける「絶対貧困」とも呼ばれる地域間、国家間の深刻な富の偏在と、国家内部における富の偏在を前にして、これを、まずは教会が、その「貧しくされている者たち」の側に立ち、彼らを優先的に選ぶ教会になれという神の警告であり、招きなのだと受け止め、その応答として「貧しい者たちの優先的選択」（The Option for the Poor）という立場を打ち出した。この立場に立つとき、人は「貧しさ」を構造的に生み出す現代世界のシステムについて、その中での神関係、社会関係のあり方について、くり返しくり返し批判的な認識を深めて行かざるを得ない。出エジプトの物語は現代の物語でもある。

月例研究報告

チリ現代詩と先住民文化

三角 明子

スペインを旧宗主国とするイスパノアメリカの国々のなかで、チリは先住民人口の割合が2002年の国政調査では5%弱（69万人強）と比較的低いが、2010年9月に独立200年を迎えるにあたり、政府やマスコミはマプチェ族をはじめとする先住民に大きな位置を与えた「チリ」像を広めようとしていた。例として、TVN（チリ国営放送）による200年記念スポット『ありがとうチリ、こんなにたくさんのものをくれて』

http://www.youtube.com/watch?v=xErG5CAhiDo&feature=plcp&context=C3f69283UDOEgsToPDskIiEj85RpP6gU-0yZOEqjsH（2012年2月1日取得）

および、首都サンティアゴのアルトゥーロ・メリノ・ベニテス空港における写真展『チリ人の肖像ーチリ国を構成するさまざまな顔』*Retratos de chilenos:los rostros que forman la identidad nacional* などがある。

マプチェとは、かれらのことばで「大地の人々」を意味し、チリ領土（南部第9州ラ・アラウカニーア La Araucanía 中心）とアルゼンチン領土にまたがって約90万人が生活している。16世紀に征服者としてやってきたスペイン人との戦いは、20世紀になってようやくマプチェ族の「平定」という形で終了した。

しかし現在に至るまで抗争の火種は尽きず、先祖から受け継いだ土地の返還を求めて暴力を併用する活動家もいる。先住民によるこのような犯罪がピノチェト軍事政権（1973-1990）下に制定された反テロリスト法によって裁かれることも大きな問題であり、2010年・2011年には服役中のマプチェ族が反テロリスト法の適用撤回を求めて長期のハンガーストライキを行うなど、チリが解決すべき重要課題のひとつとなっている。

チリ文学、特に詩において、先住民やその文化は詩の「題材」のひとつに過ぎなかったが、スペイン語圏文学全体における存在は大きい。16世紀に征服者のひとりとして現在のチリに渡ったアロンソ・デ・エルシーリャ Alonso de Ercilla（1533-94）が、自身の体験をもとに著した叙事詩『ラ・アラウカーナ』*La Araucana*、およびパブロ・ネルーダ Pablo Neruda（1904-1973）がアメリカ大陸そのものを歌いあげた『大いなる歌』*Canto general* で、上掲『ラ・アラウカーナ』に歌われた英雄たちをとりあげている。

現在のチリ詩において、先住民出身あるいは先住民文化を題材として作品を作る詩人は数の上では決して多くはないが、その中で突出した存在がエリクラ・チウアイラフ Elicura Chihuailaf（1952-）である。ラ・アラウカニーア出身のチウアイラフはマプチェ語とスペイン語の両方で作品を著し、現在ではチリ言語アカデミーの会員でもある。

本研究発表では、独立200年を迎えたチリにおける先住民的要素の「見せ方」に目配りしつつ、先住民系の詩人として唯一普遍的価値を認められたかのように見えるチウアイラフの作品世界を紹介した。

月例研究報告

「ハーマン・メルヴィルの『信用詐欺師』の主題について」

鈴木 義久

1.『信用詐欺師』までの作品

メルヴィルは第9作目の長編小説『信用詐欺師』(1857) を書き終えたあと、アメリカでの校正から出版に至る手続きをすべて弟のアランに託して渡英する。ロンドンの出版社に原稿を渡し、リバプールへ向かい、そこでアメリカ領事を務めていた、かつて隣人同士だったころに文学の話をよく交わした敬愛する先輩作家ナサニエル・ホーソンに会う。そのときの二人の会話の内容が、ホーソンの残した日記にうかがわれるが、その中で彼がメルヴィルの信仰に関して「彼 [メルヴィル] は信ずることも不信仰でいることもできない。あまりにも誠実かつ勇敢なので、彼はいずれかに徹しようとせざるを得ないのである」と記している。この短い感想の中には、『信用詐欺師』までのメルヴィルの全小説に一貫してうかがわれる共通点が見出される。それは、文字通り信仰に対する彼の安易な妥協を許さぬ真摯な姿勢と、自分の思うところをどこまでも推し進める姿勢である。そして、メルヴィルの『信用詐欺師』発表以前の雑誌掲載小説には、失敗の回避と出版元の傾向を考慮に入れて露骨な批判は避けたものの、ほとんどどの作品にも共通して、同時代のアメリカ社会の抱える宗教、政治を始めとする諸問題を作品を通して暗に批判的に提示するといった特徴が見られる。

ホーソンの特質がシェイクスピアの特質に類し、彼をアメリカのシェイクスピアだと高く評価しているメルヴィルの評論「ホーソンとその苔」(1850) の中で、次のような記述がある。

> ハムレット、タイモン、リア、イアゴといった悲運の登場人物の口を通して彼 [シェイクスピア] は、まともな人が言ったり、仄めかしたりすれば気狂いだと思われるくらいものすごく真実だと感じるような事柄を、巧妙に言ったり、時には仄めかしたりする。[中略] わたしがシェイクスピアを賛美するのは、彼のしたことよりもむしろ、しなかった、あるいはするのを控えたことに対してである。というのも、この虚偽の世界では、真理は森の怯えた白雌鹿のようにやむをえず逃げ回っている。そして、抜け目ない一瞥でのみその姿を現わすのは、真理を語る偉大な技法を駆使できるシェイクスピアや他の巨匠の場合も同じなのだ―たとえそれが隠れていようと、短時間であろうとも。

ここにはメルヴィルがシェイクスピアの悲劇作品から学んだ文学技法が語られている。彼は雑誌掲載小説でもこの技法を彼なりに実践し、明確に言わなくとも、わかる読者には真意が伝わるような書き方をしている。都会生活で精神を病み人生に絶望した筆耕、田舎で自尊心を高く持ち、自らの分身であるかのような雄鶏を手放すことなく餓死の道を選ぶ樵、都会で優雅な暮らしをする紳士と対照的な暮らしの貧乏人、国家のために命を堵して働き何ら報酬を与えられぬ兵士、北部の製紙工場で機械に仕えるように健康を害しつつ働き続ける賃金奴隷の乙女、機械の導入によって人力に替えようとする人命軽視の物質主義者の匠、反乱奴隷によって精神的に破壊される奴隷運搬船の船長、遠方の明かりの正体を求め、それを捕捉したときの幻滅を味わう男の話を、主に第一人称だが、語り手に何もかも説明し、解説まで施していた長編小説の時とは違って、控え目に客観的に描き、

解釈は読者に委ねようとしている。

そして、今度の長編小説『信用詐欺師』でも雑誌掲載小説の時と同様の技法を用い、特に後半は、戯曲のように登場人物の対話を中心とし、語り手はできるだけト書きのように場面環境―登場人物の対話の環境―の説明に終始している。

2.『信用詐欺師』の主題について

メルヴィルは『信用詐欺師』で、シェイクスピアから学んだ上記の技法を用い、西部への進出で好景気に沸くアメリカ第一の交通の要衝地を流れる大河ミシシッピー川を下る大蒸気客船を舞台とし、まず題名にもある正体不明の詐欺師を白い服の男として登場させ、石版に聖書からの引用―「愛」の大切さを説いた短文―を次々と記して乗客に示すが、追いやられてしまう場面を皮切りに、7度姿を変えて異なる相手の乗客から、金を巻き上げたりする場面を描き、詐欺師と乗客との間の会話や交流を通して、聖書の福音書の説く「愛」の欠如に起因する、19世紀中葉の悩める開発超途上国アメリカの抱える問題、特に奴隷制に起因するさまざまな問題を、提起している。

2011年度ランゲージ・ラウンジ活動報告

教養教育センター　ランゲージ・ラウンジ運営委員会

1. 総括

2011年度ランゲージ・ラウンジは、東日本大震災にともなう学暦の変更により、活動の開始が通常よりも遅れることとなったが、春・秋学期ともに、英語、ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語のどの分野でも、昨年度までの活動を引き継ぐとともに拡充に向けて努力することができた。

昨年度からの変更点は大きく3点が挙げられる。第一に、これまで活動拠点としてきた138教室は、2011年度より国際交流センターがインターナショナルラウンジ（8号館）に移動したことを受け、ランゲージ・ラウンジの専有とすることができた。これにより、授業期間の月曜から金曜まで、諸外国語の活動を行った。第二には、ラウンジに置く図書の充実にも力を注ぎ、特にラウンジ開室時間外にも参考書等の閲覧・貸出ができるように体制を整えた。現在は、すべての図書に貸出カードを添付し、教養教育センター共同研究室で管理を行っている。第三に、ランゲージ・ラウンジの認知度を高める努力の一環として、今年度は新たにブログを開設するとともに、それと連動するかたちでツイッターの利用も始めた。各言語からのお知らせなどの情報が一覧できるようになっている。

2. 活動詳細

2.1 英語部門：北村文、ピーター・ソーントン

英語部門ではこれまで、英語の自律学習を一学期間にわたって集中的にサポートするIndependent Language Study Support Program（ILSSP）と、昼休みに英語のレクチャーを聴くLuncheon Lecture Seriesをふたつの軸として活動を重ねてきた。今年度は、以下に述べるように、ILSSPが中心となった。

これまでも参加した学生から高い評価を得てきたILSSPは、今年度も春学期と秋学期の二期にわたり実施した。毎週金曜日の12:30から15:30をコーディネーターの升井裕子氏（本学非常勤講師）との面接時間とし、学生がそれぞれにたてた目標を達成すべく自律学習に励んだ。春学期については、学暦の変更にともないオリエンテーションを開催することが困難であったため、例外的措置として授業期間開始前にポートヘボンで参加者を募集し、Eメールで応募するかたちをとった。秋学期は通常どおりオリエンテーションを行い、募集と選抜を行った。いずれにおいても採用予定人数を大きく超える数の応募があったことから、英語学習に対する関心とニーズの高まりを痛感させられた。特に秋学期のオリエンテーションには90名を超える学生が出席し、同時開催した春学期ILSSP修了式においても修了証の授与や優秀賞受賞者のスピーチに大きな拍手が起こった。各学期の参加者数の詳細は表1のとおりである。

もうひとつの主軸であるLuncheon Lecture Seriesについては、上記の理由もあり、残念ながら通常どおりの開催がかなわなかった。6月30日には、米国国務省のDarrell Jenks氏による講演を予定していたが、ご本人が病気のため帰国されることになったので、秋学期の講演予定者のピーター・ソーントンが代替し、「Globalization and Hollywood」というタイトルで講演を行った。学外から講演者を招き、地元横浜の歴史を英語で学ぶことができるという貴重な機会を逸してしまったが、学生の

参加数は約60名と、こちらも英語学習への高い動機づけが垣間みられた。秋学期も引き続き在日米海軍の関係者を招待すべく努力したが、諸事情により講演会の実現には至らなかった。今後も交渉を続け、より幅広いトピックを扱うレクチャーシリーズとしていきたい。

以上のように、いくつかの不測の事態に見舞われながらも、今年度も英語部門の活動を継続できた。学内での認識も広まり、有機的な運営が可能となったが、同時に、コーディネーターや講演者の恒常的な確保、そして学生間の根強いニーズであるスピーキングの場の提供など、課題も残っている。これまでの蓄積と来年度への架け橋とできれば幸いである。

表1　ILSSP 実績

実施期間	参加者数
春学期（5月～9月）	16名（文学部4、経済学部1、社会学部1、法学部3、国際学部7、心理学部0）
秋学期（11月～3月）	17名（文学部2、経済学部2、社会学部1、法学部2、国際学部10、心理学部0）

2.2 ドイツ語部門：川島建太郎

「ドイツ語 de ランチ」と題して、外山知子氏（本学非常勤講師）が毎週木曜日の昼休みに行った。参加人数は春学期が8～13名、秋学期が9～13名だった。出席率は秋学期の方が高かった。参加者は主にドイツ語を履修している1年生だったが、ドイツ語を履修している2年生、履修していない2年生も参加していた。内容は昼休みの前半に「テレビでドイツ語」2009年4月～9月放映のベルリンを紹介するスキットと文法説明を見て、後半に詳しく文法の解説をしたうえで、テキストの文法練習と講師が用意したプリントや黒板を使った練習をし、最後にペア練習を行った。

会話の内容は、道の訊き方、買い物の仕方、自己紹介の仕方、ものを頼むときの表現、喫茶店などでの注文の仕方などが中心だった。文法的には動詞の人称変化、名詞の格変化、前置詞、話法の助動詞などの習得の他に、よく使う名詞、形容詞の語彙を増やすよう努めた。

短期留学した学生に報告してもらう回も設けた。

2.3 スペイン語部門：三角明子

スペイン語部門では、今年新たな試みをふたつ開始した。

・オンライン自律学習コースの導入

セルバンテス文化センターが提供するスペイン語学習用マルチメディアコース AVE（アベ）を用いた自律学習を導入、春学期31名、秋学期41名が受講した（本年度は希望者全員に受講を許可）。

・ネイティブ講師によるスペイン語会話クラブ

本学非常勤講師ジョン＝ダビ・バリエントス氏を担当に、2011年11月8日（火）から12月20日（火）まで計7回、昼休みの時間を利用して開講した。平均して毎回10名程度の利用参加があった。

正規の授業では飽き足らずさらに学ぶことを求める学生、留学などを経て力をつけさらに伸ばしていこうとする学生に情報を届け、さらなる利用をうながしたい。また、研究所予算で通年（毎週1コマ分）および長期休暇（5日間の集中講座を2種）に開講しているDELE受験準備講座などとも、うまくリンクしていきたい。

2.4 中国語部門：張宏波

中国語部門「中文会話倶楽部」は、2011年度も5月から授業期間中の毎週月・木曜に開催した。コーディネーターは張剣波氏（本学非常勤講師）が担当した。

授業だけでは満足できない、あるいは授業で学んだ知識を実際に使ってみたい、という意欲的な学生が毎回数名〜十数名程度集まり、担当者や学生同士で日常的な中国語会話を楽しんだり、文法事項や発音の復習・確認を行ったり、日中関係や中国に関する時事問題等について幅広い議論をしたりして展開している。また、中国大陸への留学・旅行や検定試験の準備等の相談をする機会も増えてきた。そのほか、パソコンでの中国語入力法の指導なども行った。

参加者は各学部の全学年にわたっており、学部・学年の垣根を超えた広がりが刺激を与えている。とりわけ、中国人留学生、韓国人留学生や中国大陸での留学経験をもつ日本人学生も参加しており、高い会話力を有している学生が学び合う友人を求めてやってくることも増えてきた。

さらに、中国語履修者のなかには、まず短期の中国留学を経験した上で、その後のことを考えたいという要望も少なからず聞こえてくる。ランゲージ・ラウンジへの参加がそうした姿勢を後押しする契機となるように、将来的展望を有した中国語教育の一環となるように、今後も工夫を重ねていきたい。

2.5 韓国語部門：金珍娥

2011年度韓国語ランゲージ・ラウンジにおいては、以下のような日程と体制で、韓国語自由会話を中心に週1回のミーティングを行った。

担当講師：高槿旭（コグヌク）

実施期間：春学期　2011年6月2日～7月27日　（毎週水曜日）

　　秋学期　2011年9月28日～12月21日（毎週水曜日）

教　　室：明治学院大学横浜校舎　136教室

時　　間：12時35分～13時40分

人　　数：春学期　5～6人、秋学期　4人

春学期には、①簡単な文法形式を用いて会話練習、②自己紹介、趣味、旅行、アルバイトなどをテーマに、関連語彙を提示し、会話を行った。秋学期には、学生の会話レベルが上達しており、韓国や韓国語についての質問が多くなったので、その質問を中心に会話を行った。主に、日本と韓国、両国の相違点について話し合う時間が多くなった。

担当者高槿旭の全体的な感想として、以下のことが伝えられた。「学生が韓国に非常に興味を持っており、積極的に会話に臨んでいる。少人数で話しやすく、アットホームな雰囲気で教える方も楽しく、とてもやりがいがあった。ただしレベルの差があり、韓国語が初めてである学生は来なくなることもあった。可能であれば、初級と中級に分けて行った方が効率的であると思う」

03 研究プロジェクト

記憶メディアの比較文化的研究

＊川島 建太郎・佐藤 アヤ子・高木 久夫・原 宏之　（＊は代表者）

本研究グループは、2009年度・2010年度の教養教育センター付属研究所プロジェクトにおいて、文化における記憶の役割を研究テーマとした。その実績を踏まえて今年度は、文化が形成・存続するにあたって、記憶メディアが重要な役割を果たすことに着目した。なぜなら、あらゆる記憶はメディアを通過することなしに保存・伝承されることはないからである。ただし、「メディアはメッセージである」というカナダのメディア学者マーシャル・マクルーハンの言葉どおり、メディアはそれぞれ固有の性質と論理を備えている。そのような各メディアの性質やロジックが、記憶の選択＝排除という文化にとって基本的なオペレーション自体に根底的な影響をおよぼしていると考えられるのである。本プロジェクトが研究対象としたのは、このような文化における記憶メディアの構成的な役割である。

研究グループは、上記の構想から出発し、議論を深める場となる2つの企画を準備した。本原稿執筆の段階で、両企画ともまだ開催されていないため、企画の予定と狙いを記すことで報告とさせていただく。

本プロジェクトの１つ目の企画は、芥川賞をはじめさまざまな文学賞を受賞している小説家の奥泉光氏を招聘した講演会である。奥泉氏は『シューマンの指』（2010年）などの作品で、虚構化や美化や神話化という現象から切り離すことが難しい記憶の作用を問題とすることから、作品世界を形成しているように見える。研究グループは、1990年代以降の記憶理論とも重なるところのある奥泉氏の記憶概念に着目している。この講演会は「記憶と虚構―小説の方法をめぐって」の題目により、2012年1月7日（土）の14：00～16：30に明治学院大学白金校舎2301教室にて開催される。講演会の司会は研究グループメンバーの高木久夫准教授が勤める。

本プロジェクト２つ目の企画では、カナダのマクルーハン研究者リチャード・キャベル氏を招聘し、2012年2月21日（火）の15：00～17：00に明治学院大学白金校舎10階大会議室にて講演会を開催する。キャベル氏は、著作 *McLuhan in Space. A Cultural Geography* によって国際的に知名度の高いマクルーハン研究者である。キャベル氏にはマクルーハン理論のアクチュアリティーについて講演していただく。研究グループはキャベル氏との議論を通して、記憶メディアの役割を考察する際に必要となるメディア理論の知識を深めることを目指す。キャベル氏の講演タイトルは "In-Corporating the Global Village" である。講演会の司会は研究グループメンバーの佐藤アヤ子教授が勤める。　（文責：川島建太郎）

青少年の身体的特性と健康状況に関する研究

＊越智 英輔・森田 恭光　（＊は代表者）

我々のグループは2010年度教養教育センター付属研究所プロジェクトに採択され、青少年を対象とした防衛体力の調査を開始した。その成果として、文献や学会における情報収集から未だ確立されていない防衛体力の指標の候補を絞り込むことができた（SIgA, S-cortisol）。本年度は、小学生を対象とした基礎データ（身体特性、防衛体力、日常生活・健康状況）の収集及び大学競技選手と対象に減量・テーパリング時の防衛体力について検討した。具体的な活動は以下の通りである。本稿では、後者の一部を報告する。

・具体的な研究活動内容

＜実験１及び２＞　小学生を対象とした検討

４月　参加するメンバー（測定者）との打ち合わせ
５月　実験先１（被験者）との打ち合わせ
７月　実験１実施（測定・試料回収）及び学会参加
９月　実験先２（被験者）との打ち合わせ
11月　実験２実施（測定・試料回収）
12月　実験１フィードバック
＊実験２のフィードバックは2012年３月を予定

＜実験３＞　大学生を対象とした検討

８月　参加するメンバー（験者）及び実験先３との打ち合わせ
９月　実験３実施（測定・試料回収）
11月　実験３フィードバック

＜実験４＞　大学女子柔道選手における試合前の減量・テーパリングがSIgA濃度に及ぼす影響について

【目　的】

唾液中の分泌型免疫グロブリンA（secretory immunoglobulin A：SIgA）は、上気道局所免疫の指標として重要な役割を果たす。我々は、これまでスポーツ選手や青少年における上気道感染症と運動との関連について検討を行ってきた。また、唾液中のSIgA値は、心理的要因の関与も報告されており、精神的な健康状態にも影響を受けると考えられる。

唾液採取による測定は、採血を伴わないため侵襲が極めて低いことから、試合を直前に控えた選手の場合非常に有用である。ウェイトコントロールが必要な競技においては、レスリング選手を対象に急速減量時のコンディション評価に関して報告されている。しかし、減量期間と試合前のテー

パリング後の、コンディション評価について検討した研究はない。

そこで本研究は大学女子柔道選手におけるコンディション評価として、試合３週間前（減量前）と試合直前（減量後）の唾液中 SIgA 濃度および Profile Of Mood State（POMS）の変化について検討を行うことにより競技力向上の一助とすることを目的とした。

【方　法】

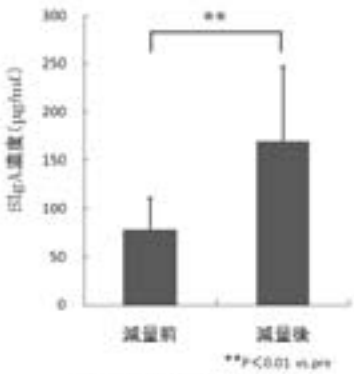


図1　減量前後のSIgA濃度

減量を必要とする健康な大学女子柔道選手10名を対象者として測定を行った。唾液採取は、口腔内を蒸留水で漱がせ一般的な方法であるサリベット（Salivette, Sarstedt 社製）を用いて、コットン部分を毎秒一回の割合で1分間咀嚼させた。その後直ちに4℃に設定した遠心分離器を用いて3000rpm で5分間遠心分離して試料を得た。SIgA は酵素免疫測定による委託測定（㈱エスアールエル東京メディカル）を行い評価に用いた。また、試合に向けて減量における心理的観察の尺度として POMS 短縮版による調査を実施した。POMS 判定は6因子と総合的な感情を測定する Total Mood Disturbance（TMD）を用いた。

【結果および考察】

測定期間中、上気道感染症状を呈した対象者は認めなかった。減量前の SIgA 濃度は78.3±32.5 μg/mℓ、減量後の SIgA 濃度は169.7±77.4 μg/mℓ であり、減量前と比較して減量後の SIgA 濃度は有意に高値を示した。（P ＜0.01）。

POMS の結果は、抑うつの項目において、減量後の方が減量前より有意に低値を示し、疲労の項目についても同様に有意に低値を示した（P ＜0.05）。加えて TMD においても、減量前と比べて減量後の方が有意な低値を示した（P ＜0.05）。

以上の結果から、3週間という比較的長期間で減量を行うことによって免疫機能が向上し、試合に向けたコンディションづくりが順調に行われたものと考える。加えて、抑うつ、疲労、TMD の値が上昇していることから、心身ともに計画的な減量と試合前のテーパリングが実施できたものといえる。

「教養教育としてのカフェ」研究：カフェ・ネットワークの構築とその意義報告

＊植木 献・猪瀬 浩平・上野 寛子・三角 明子　（＊は代表者）

猪瀬企画

郡上おどり in 戸塚　（会場　横浜キャンパス＆善了寺）

今年も戸塚まつりにおいて、郡上おどりを通じたトークライブとワークショップ、そして踊りの実演を行った。郡上の若手御囃子グループ「郡上舞紫」のメンバー10名をゲストとして招き、大学キャンパスでは郡上おどりの歴史的・文化的背景に迫るトークライブと、郡上おどりの歌詞を自作し、お囃子で実演するワークショップを行った。その後、矢部町の善了寺に移動し、郡上おどりの実演を行った。あいにくの雨で本堂での開催となったが、50人以上の方の参加が見られた。

今年度の特色は、共通科目「ボランティア実習」や、国際学部の「インターンシップ」などの授業を通じて、郡上八幡との関係を深めた学生が、プログラムを企画した点にあり、報告会や研究発表とは別の形で、授業の成果を表現する方法の探求を行った。

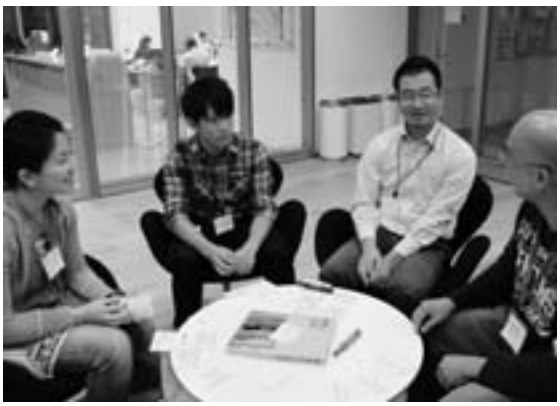
4年目の開催となり、地域の方も戸塚の郡上おどりを初夏の恒例行事として楽しみにしている。踊りを通じた、地域連携が生まれている。

三角企画

大学全体が「カフェ」のように風通しのいい、居心地のいい場所になること、そしてそんな空間づくりは自分たちにもできることを学生が実感し実践していけるように、〔充実した会話＝対話を経験し、対話の場づくりを学ぶ〕ためのシリーズを実施した。

まず「見せる」段階として、2011年7月1日（金）、嶋田氏のクラスを借りてワールドカフェを実施。学生たちに〔自由な、けれども雑談ではない濃い会話〕を体験してもらった。このワールドカフェには嶋田氏クラスの約25名が参加した。

次いで三回連続開催予定のダイアログ講座を10月5日（水）に実施した。講師に博報堂勤務の組織変革ファシリテーター・兎洞武揚氏を招き、〔創造的な対話って？　体験してみよう！〕というテーマで、ブラインドウォーク、ワールドカフェなどを行った。学生10名、教員3名、高校生・戸塚区役所職員を含む学外者5名（プラス講師側3名）が参加、10代から60代までさまざまな年齢・立場のひとびとが語り合う場となった。また、このイベントは教養教育センター提供のFD関連催事として教授会で承認を受け、経費はセンター予算から提供を受けた。



二回目は2012年1月16日（月）に学内で実施した。やはり外部講師を招き、短めのワー

ルドカフェ体験に続いて、参加者自身がこれからワールドカフェを設計・実施することを念頭に置いた実践的講座を企画した。第三回は、学生の春季休暇時期に実施することを考えている。内容は未定だが、学内ではなく戸塚駅近隣で行い、広く学外者の参加を呼び掛けることにより、学生に新しい出会いの機会を与えたい。

植木・猪瀬企画

べんとー Café ＆ Café du PRIME 共催企画

「食卓を囲みながら、福島の今、私たちの今を語る会」（会場　白金キャンパス）

宗教部で開催されているべんとー Café と、国際平和研究所で開催されている Café du PRIME のジョイント企画として、現在、福島で子どもと放射能の問題に取り組んでいる、原田麻以氏（NPO 法人こえとことばとこころの部屋スタッフ）を招き、カフェ形式で語り合いの場を持った。両企画が共催することで、多様な学生や教員の出会いと語り合いの場となり、また食卓を囲むことによって、それぞれが日常に抱えているものの、なかなか共有する場のもてない、原発や放射能をめぐる不安を共有し、議論のできる場となった。27 名の学生、教員 3 名に加え、飛び入りで学長と卒業生の渡辺陽一氏も参加した。

12 月 22 日午後開催

「福島とつながる、原発危機を越えて生きる、自然食を囲む座談会」（会場　横浜キャンパス）

べんとー Café と、Café du PRIME のジョイント企画として、また学生団体 CTC も共催し、実施した。「放射能から子どもたちを守る福島ネットワーク」の世話人である椎名千恵子氏を講師として、玄米食・

自然食による料理教室と、料理を囲む座談会を開催した。同日昼休みからＥ館調理室で夕方まで行ったが、学生たちの関心も高く、40 名以上の学生が集まった。

上野企画

1)「学生 FD サミット 2011 夏」への参加

キャンパス内でカフェを形成するための方法論について学ぶため、８月27、28日の両日、立命館大学で開催された「学生 FD サミット 2011 夏」に本学学生８名とともに参加した。今回で開催４回目となった本サミットには全国35大学から270名以上にのぼる学生と教職員が集まり、大学の垣根を越えたグループワークによって大学に関するさまざまな問題点を議論し、改善方法を検討したり、各大学でのユニークな取り組みを知る機会となった。なお、第１回目（2009年夏は参加者100名）以降、回を重ねるごとに参加大学および参加者数が増えていることから、２日間の充実した時間とそこで得られる学びが全国的に広がりつつあることを実感できた。

2)「学生主体型カフェ２週連続企画：大学における真のリア充を求めて」第１弾（12月５日）および第２弾（12月12日）を8号館インターナショナルラウンジにて実施

学生による大学生活活性化カフェ企画（写真１：学生による司会・進行の様子）。学生たちが選んだ学びたい先生（帝京大学高等教育開発センターの井上史子先生）に2週連続で講演とワークショップを実施していただいた。

第１弾では「大学教育のパラダイム転換」についての講演がなされた。大学の目的は学生の学習を生み出すことであり、大学を構成する3者（学生、教員、職員）が「学生が学びの主体である」という考えに転換することの重要性、すなわち、FD から ED（エデュケーショナル・ディベロップメント）への意識改革が今まさに必要とされていることを学んだ。本学からは全６学部および全学年にわたる学生が参加した。さらに、帝京大学や東洋大学の学生や院生も加わり、帝京大学の学生からは次年度から導入する新たな仕組み「学生が教員の授業をコンサルティングする SCOT（Students Consulting on Teaching）」についてのトレーニング内容の紹介がなされた。本企画における参加者の割合は学生（83%）、教員（7%）、職員（10%）となり、講演に引き続き行われたグループワークでは大学を構成する3つの立場や大学の垣根を越えた交流が実現した（写真２：グループワークの様子）。第２弾では「ロジックツリーによる問題分析の方法」を学び、大学に関する問題等について原因と結果の対応関係を見極める訓練を行った。両日ともに盛況となった。

「大学ってなんだっけ？」。この問いに答えることすら困難な時代となっている。学外でのカフェ（学生 FD サミット）への参加により全国の大学が抱える問題を共有し、学内では学びの主体者である学生自身と教員が企画を立案し、そこに職員も参加することで、互いにさまざまな視点を取り込む

機会が生まれ、理解が進む。今年度の試行によって大学のより良いあり方が見いだせる可能性を感じた。次年度も大学が学生にとって有機的・生産的な場となるよう新たな試みを実施していきたい。

写真1

写真2

近現代日本におけるアジア系諸民族のネットワーク

＊渡辺 祐子・金 珍娥・嶋田 彩司・鄭 栄恒　（＊は代表者）

本プロジェクトの目的は、近現代日本における在日アジア系諸民族のネットワークについて、歴史的、文化的視点から研究することである。中心的な研究対象を中国、台湾、朝鮮出身の諸民族とし、さらに東南アジア地域出身者をも視野にいれることを目標としたが、メンバーの多様な専門領域を考慮し、プロジェクトのテーマに間接的に関わる研究にまで間口を広く設けることとした。

プロジェクトの主たる活動である研究会は、下記の要領で開催された（原稿執筆時点で第２回は予定）。発表担当者の報告の内容をそれぞれ添付するので、具体的な中身についてはそちらを参照されたい。

近現代日本におけるアジア系諸民族のネットワークプロジェクト第１回研究会

2011年11月23日（水）11時～12時半

鄭栄恒「GHQ占領期における在日朝鮮人・台湾人の権利擁護運動―日本敗戦から日本国憲法施行まで―」

近現代日本におけるアジア系諸民族のネットワークプロジェクト第２回研究会（予定）

2012年２月22日（水）11時～13時

嶋田彩司「被差別部落問題と中国人、朝鮮人」

渡辺祐子「明治学院の中国認識」

第１回研究会　研究報告

鄭栄恒「GHQ占領期における在日朝鮮人・台湾人の権利擁護運動
――日本敗戦から日本国憲法施行まで――」

現代日本の出入国管理／外国人法制の骨格は、日本敗戦直後のGHQ占領期に形作られた。ところが、1970年代までの30年間、その主たる対象となったのは、旅券を所持し査証の発給を受けて外国から渡来する「外国人」ではなく、日本の台湾・朝鮮への植民地支配の結果、日本へと渡り、居住することになった朝鮮人・台湾人たちであった。このため、敗戦後日本の出入国管理／外国人法制の形成過程を明らかにするためには、在日朝鮮人・台湾人の植民地期における法的地位の敗戦後日本における処遇を理解することが重要な課題となる。

とりわけ、1947年５月２日に公布された勅令第207号「外国人登録令」は、敗戦後日本が最初に公布した総合的な出入国管理／外国人登録法令であり、後の外国人登録法・出入国管理令の前身にあたる重要な法令である。外国人登録令により旧植民地民族たる朝鮮人・台湾人は「外国人」とみなされたが、ここでいう「外国人」の意味も、敗戦前後における植民地の地位をめぐる日本政府の解釈への理解抜きには明らかにしえない。

敗戦直後における日本政府の旧植民地民族への基本的な姿勢の前提には、講和条約の発効まで「外

地」への主権は維持されているとする「外地主権維持論」があった。一方、植民地からの「解放」を迎えた在日朝鮮人は、ポツダム宣言を根拠に、日本支配から脱した「独立国民」としての地位を主張した。一見、外国人登録令は後者の主張を容れたもののように見えるが、令第11条は「台湾人のうち内務大臣の定めるもの及び朝鮮人は、この勅令の適用については、当分の間、これを外国人とみなす」と規定するに留めており、実際には外登令の適用に限って「外国人とみな」されたに留まった。むしろ、外登令上の「外国人」に限定されたため、国籍は講和条約まで変動せずとの日本政府の既定方針は維持されたとみることができる。

日本国憲法施行前夜の外国人登録令施行の意味は、日本国憲法下の「国民」から旧植民地民族を除外すると同時に、朝鮮民族の独立要求を封じ、旧帝国の「臣民」たる地位へと押し込めるところにあったといえる。

第2回研究会 研究報告（予定）

嶋田彩司「『破戒』のテクストと水平社の被差別部落解放運動」

島崎藤村の長編小説『破戒』は、日露戦争で世相騒然たる小諸時代に書き始められ、住居を西大久保に移した1906（明治39）年に自費出版された。私家版といいながらも初刷を完売し、増刷がなされるほど好評を博した作品であり、また先行する（あるいは同時代の）同類の作品に比してその新規性は歴然としており、後世の文学史家によって日本自然主義文学の嚆矢と評価されている。

さて、この『破戒』には、大別して二種のテクストが存している。上記の初刷（以下、初版）がそのひとつであることはいうまでもない。この初版グループのテクストは1929（昭和4）年まで流布したのち、10年にわたって増刷が停止され、1939（昭和14）年に「身を起すまで」の別名を付していわゆる改訂版が出版された。これが第2のテクストである。

初版と改訂版の異同については種々を指摘することができるが、いま本発表の主旨に即して一点のみをあげるなら、舞台となる信州の被差別部落民の起源に関連して、初版に「東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のように、朝鮮人、支那人、露西亜人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末」云々とある箇所が削除されたことが注目される。

1939年といえばノモンハン事件が発生した年であり、その前後の時局を鑑みれば、戦時下のナショナリズムと表裏をなすアジア諸地域の人々に対する蔑視が反転投影されたものであることは想像に難くない。そしてそのような時代の要請にしたがって、藤村自らも絶版から改訂にいたる一連の経緯の中で明確な抵抗を示すことはしなかった。

＊　＊　＊

しかし、より興味深い事実は、この改訂に至る経緯に水平社運動の関係者が関わり、初版の増刷停止と改訂版の出版にある種の圧力をかけたことである。その具体的な経緯については、宮武利正や青木正美の調査によって一部が明らかであるが、それらから覗い得ることは、1922（大正11）年

に「我々の祖先は自由、平等の渇仰者であり実行者であった」といい「我々は（略）祖先を辱め人間を冒瀆してはならぬ」と「兄弟」にむかって呼びかけた（「水平社宣言」）被差別部落解放の運動家たちが、自ら日本民族としての正統性を主張して、「異邦人」（上掲「破戒」）との同一視への抗議と峻別を要求したという歴史の事実である。このことと、のちに1940（昭和15）年に帝国議会において「被差別部落を侮辱する観念は、直ちに又支那の人々、朝鮮の人々を侮辱し、制圧する心であります。斯る差別観念こそは、八紘一宇の肇国精神に悖り…」と発言する「部落解放の父」松本治一郎が内面化した平和観とのあいだにさしたる径庭はない。

もとより、私は水平社の圧力に抗すことをなし得なかった藤村を批判するものではないし、また、水平社関係者のいう「兄弟」の狭隘さを言い募るつもりもない。1942（昭和17）年11月の第一回大東亜文学者大会において万歳三唱の音頭をとった藤村もまた時代の子であった。のみならず松本治一郎の落ちた陥穽は、中国や韓国との相互理解を念願しつつ「東アジア共同体」を唱える者にも我知らず用意されている。被差別者たちの渾身の自己主張と、藤村のごとき善意ある同情者の支援によって、明治以降の被差別部落解放運動が結果としてまた別の差別を生産する一助となってしまったという事実をまえにして、私は自らの足許のあやうさに立ちすくみ、私をそのように立ちすくませる文学テクストの「読解」という作業の意味を考えるのである。

渡辺祐子「明治学院の中国認識」

戦前明治学院に「留学」していた台湾出身者が懐かしく回想する「差別のなかった明治学院」の具体例としてしばしば挙げられるのは、高等部校長都留仙次の留学生に対する態度である。しかし一教員の親切な対応を明治学院全体のアジア認識、なかでも中国認識と置き換えることは慎まなくてはならないだろう。もっとも学院全体の中国認識を明示することもまた極めて困難である。ここでは総理（学院長）を務めた二人の人物に焦点を当てて、学院の対中観の一側面を考えてみることとする。

明治学院と極めて深い関係にあった日本基督一致教会が1878年4月3日に開催した第2回中会記録に、宣教師アメルマンの「支那国ノ中趙州セン州アモヘニ我ガ日本中会ニ似タル会アリ故ニ彼ノ会ニ音信ヲ通シテハ如何」という建議が見える。福建省の泉州とアモイで中国で初めて形成された中会（presbytery）に手紙を書いてはどうかという提案である。これは速やかに可決され、日本基督一致教会は中国の教会との公的関係を結び、ここからしばらくは日中教会間の交流が続くことになった。だが明治学院自身は、日清戦争後からアジア・太平洋戦争開始後の東亜科設置以前までの間、中国との交流を重視したとは言いがたい。日清戦争が終結してから数年後、日本を目指す中国人留学生が急増し、留学生教育のための予備学校が次々に設立された時期にも、明治学院は目立った動きを見せなかった。この姿勢は、留学生教育に積極的に参画した立教大学とは著しい対象をなしている。当時明治学院総理であった井深梶之助は、日本のキリスト教界の代表的人物として学院

以外のキリスト教団体の役職にもついており、その関係で中国に招かれることもあったが、井深の経験は学院全体の事業に必ずしも反映されなかったし、井深自身がそうした努力をした形跡も残っていない。

井深自身は1899年から1906年までの間に数度にわたって韓半島、満州、中国を訪問しているが、彼が残している訪中の記録から読み取れるのは、中国人キリスト者との交わりに積極的に飛び込んでゆくよりも、在華宣教師と在華日本人キリスト教関係者や日本企業の面々との交流に重きを置いていることである。彼の中国人に対するまなざしも好意的とは言えず、風紀の乱れや頽廃ぶりを嘆き、日本人による中国人教化を前提とした在華日本人伝道の必要性を語ったりしている。それは植民者のまなざしというほど露骨ではないが、悪意のない中国蔑視が感じられなくもない。この点、井深の後任として明学総理に就任した田川大吉郎とは大きく異なっている。したがって井深の場合、学院と中国との関係強化を推進する旗振りをするほど中国への思い入れは強くなかったと言えるだろう。

では、井深の後継として第三代総理に就任した中国通の自由主義者、田川大吉郎の場合はどうであったか。田川は1915年から1941年までの間、少なくとも10回前後中国に渡っており、1922年から1935年までの明治学院在任中は、日本キリスト教連盟の代表として訪中団に加わり、中国との和解と交誼に務めようとした。また1932年満州国成立直前の1月15日に日本基督教連盟が発表した、満州事変に関する「声明書」（日本の立場を弁明し、日中の友好を祈るというもの）の起草にも関わっている。

しかし田川は、自らの中国への関心と学院運営との間には一線を画していた。そして明学総理辞任後、ある意味で水を得た魚のごとく対中国問題により深くコミットし、現地に赴きそこから発信するかつての都新聞記者時代のスタイルを復活させている。日中戦争勃発後も度々中国に足を運んだ田川は、注意深く婉曲的な言い回しで「支那人の友人達と逢ふことがはるかに困難」になったと反日感情の増大への懸念を述べ、軍の宣撫活動に協力する日本人宣教師をやんわりと遠まわしに批判した。こうした「反軍的」発言のゆえに、田川は1940年大阪憲兵隊に検挙送検され、禁固3年執行猶予4ヶ月の処分を受け控訴する。そしてこのまさに紀元二千六百年に当たる1940年、明治学院は時局の要請に進んで答えるようとした矢野貫城院長の決断により、高等学部に「東亜科」を設立したのであった。東亜科設立にかかわることのなかった田川自身は、刑確定後日本を脱出、敗戦後まで上海で隠遁生活を送ることになる。

Stretch-Shortening Cycle による筋出力増強のメカニズム

～伸張性収縮中の筋・腱複合体の動態、運動皮質および脊髄の運動ニューロンの興奮性に着目して～

＊黒川 貞生・亀ヶ谷 純一　（＊は代表者）

【目　的】

筋が短縮性収縮をする直前に、Prestretch（前伸張、反動動作：すなわち伸張性収縮）を課すと、そうでない場合よりも短縮性収縮時のパフォーマンス、つまり筋出力や効率が向上する。この様な動作を SSC（Stretch-Shortening Cycle）と呼び、このような現象はヒトおよび動物を用いた実験で多数報告されている。

ところで、筋出力は、神経系の筋への入力と、効果器としての筋･腱複合体の動態の影響を受ける。すなわち、前者については動員される筋への大脳の運動皮質および脊髄の運動ニューロンの興奮性の変調、後者については筋線維の長さ・速度変化、羽状角および腱組織の弾性特性が要因として考えられる。したがって、SSC による筋出力増強のメカニズムを解明するには、動員される筋への神経系の興奮性の側面､および筋・腱複合体の動態の側面との両側面からの現象を観察する必要がある。

さて､本年度の当初の計画では､SSC 中の筋・腱複合体の動態のみを解明することを計画していた。しかし上述のような理由から､計画を若干修正し､まずは､伸張性収縮中の筋・腱複合体の動態に加え、運動皮質および脊髄の運動ニューロンの興奮性の変調も観察し、筋出力増強メカニズムについて検討することにした。

【研究の進捗状況】

SSC 運動は事前に遂行される伸張性収縮相とその直後に遂行される短縮性収縮相から成る。そこで、まず今年度は、①伸張性収縮相における運動皮質および脊髄の運動ニューロンの興奮性の変調を観察する方法論の確立、②伸張性収縮相における筋・腱複合体の動態を超音波 B モードで縦断撮像し、筋線維長および羽状角を計測する方法の確立、③これらの両方法を SSC 運動に適用することを目指した。

タスクの選択：

タスクとして、右脚の足関節の背屈・底屈からなる SSC 運動を選んだ。つまり、背屈時に下腿三頭筋は伸張性収縮をし（動作は等尺性収縮より開始する）、引き続く底屈時に短縮性収縮をする。なお、運動範囲は、伸張性収縮および短縮性収縮ともに、20 度（底屈位）から -15 度（背屈位）の 35 度とした。運動速度は、足背屈・底屈ともに35deg/sec および140deg/sec の2種類とした。今年度は、SSC 運動の最初に出現する伸張性収縮相を対象に実験方法の確立を目指して実験を重ね、充分なデータを得ることができた。

運動皮質および脊髄の運動ニューロンの興奮性の変調を観察する方法：

経頭蓋磁気刺激法（TMS; Transcranial Magnetic Stimulation）：運動皮質と脊髄運動ニューロンプールを併せた皮質脊髄路の興奮性を観察する方法として TMS を用いることとした。これまでは、この方法の信頼性および再現性を確認するために、伸張性収縮中に足関節が -10 度（10 度背屈位）になった時点で、経頭蓋磁気刺激を行い、ヒラメ筋から得られた運動誘発電位（MEP; Motor Evoked Potential）の Peak to peak 等を分析し、データを収集してきた。 その結果、求めた CV（変動係数）

および ICC（級内相関係数）から判断して、この方法が十分に高い信頼性および再現性を有していることが示された。

脊髄の運動ニューロンの興奮性の変調を観察する方法：

誘発筋電図法：脊髄の運動ニューロンの興奮性を評価する方法として、誘発筋電図法を用いることとした。これまでは、この方法の信頼性および再現性を確認するために、TMS と同様、足関節角度が -10 度になった時点で頸骨神経の電気刺激を行い、ヒラメ筋から誘発された M 波（Mass action potential）および H 波（H reflex ; Hoffman reflex）の Peak to peak およびそれらの比を分析して、データ収集を重ねてきた。その結果、求めた CV（変動係数）および ICC（級内相関係数）から判断して、この方法が十分に高い信頼性および再現性を有していることが示された。

筋・腱複合体の動態を観察する方法：

筋・腱複合体の動態を観察する方法として、超音波 B モード縦断撮像法を用いた。これまでは、伸張性収縮相のヒラメ筋の動態を Frame rate 100Hz で連続的に撮像し、得られた動画を1枚ずつ自作のマクロを組み込んだ画像分析ソフトで筋線維長および羽状角を計測し、測定・計測の信頼性および再現性を確認するために実験を重ねてきた。その結果、求めた CV（変動係数）および ICC（級内相関係数）から判断して、この方法が十分に高い信頼性および再現性を有していることが示された。

その他：

伸張性収縮中、筋トルク、筋電図（EMG：ヒラメ筋、腓腹筋、前頸骨筋）、足関節角度の信号は、A/D 変換ユニットを介して PC に保存した。なお、これらの信号と TMS 装置、電気刺激装置および超音波 B モード撮像装置から得られるデータは同期して収録した。

【本実験のデータ取得】

上述したように、実験のセットアップおよび実験方法を確立することができたので、これらの方法を用いて、健康な成人男子10名を被験者としてトルク、EMG および超音波縦断画像等の充分なデータを取得した。

現在、これらの膨大なデータについて分析中である。

図1. 実験セットアップ

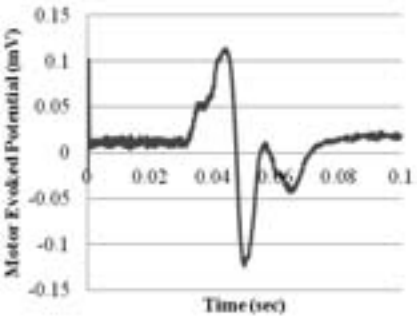


図2. 張性収縮中にヒラメ筋より記録した MEP (Motor Evoked Potential) の典型例

04 研究業績

上野 寛子

【論文（共著）】

“Phase- Ⅱ conjugation ability for PAH metabolism in amphibians：characteristics and inter-species differences” *Aquatic Toxicology* 105（3-4）：pp.337-343、2011年10月

「自然科学系教養科目履修における学習効果を高める教育手法の検討」『初年次教育学会誌』（初年次教育学会）第4巻第1号、2011年12月、pp.55–62

「入学前教育による文系大学進学生の自然科学系科目の履修動機づけの試み」『初年次教育学会誌』（初年次教育学会）第4巻第1号、2011年12月、pp.87–94

【学会発表】

「アカハライモリとアフリカツメガエルにおける異物代謝酵素の比較」日本爬虫両棲類学会第50回記念大会（京都大学）、2011年10月

越智 英輔

【論文】

大学バドミントン競技における腹筋肉ばなれの発生要因 .『日本臨床スポーツ医学会誌』. 19（1）：340-346. 2011年 4月 .

Muscular hypertrophy and changes in cytokine production after eccentric training in the rat skeletal muscle. *Journal of Strength and Conditioning Research.* 25（8）：2283-2292. 2011年8月 .

大学男子体操競技選手における椎間板変性の発生因子に関する研究 .『日本臨床スポーツ医学会誌』. 19（1）：505-510. 2011年 8月 .

Blood flow-restricted training does not improve jump performance in untrained young men. *Acta Physiologica Hungarica*. 98（4）：465-471. 2011年12月 .

【学会発表】

Repeated bouts of lengthening contractions cause muscle atrophy and dysfunction in rat medial gastrocnemius muscle. *40th European Muscle Conference*（Berlin,Germany）2011年9月.

レジスタンストレーニングによる筋肥大にはタンパク質分解抑制が重要である. 第66回 日本体力医学会大会（於　山口県）2011年9月.

行動体力および防衛体力からみた中高生における運動・スポーツの必要性について. 第66回 日本体力医学会大会（於　山口県）2011年9月.

筋損傷に伴う神経再生治癒過程の解析. 第66回 日本体力医学会大会（於　山口県）2011年9月.

角速度の速い伸張性収縮の繰り返しは骨格筋の萎縮を引き起こす. 第66回 日本体力医学会大会（於　山口県）2011年9月.

下り坂走後のラット骨格筋アポトーシス応答. 第66回 日本体力医学会大会（於　山口県）2011年9月.

大学女子スポーツ選手における骨代謝マーカーおよび骨質関連マーカーに関する研究. 第22回日本臨床スポーツ医学会学術集会（於　青森県）2011年11月.

大学女子ラクロス選手における骨代謝・骨質関連マーカーに関する研究. 第22回日本臨床スポーツ医学会学術集会（於　青森県）2011年11月.

金 珍娥（きむ じな）

【論文】

「〈非述語文〉の現れ方とDiscourse syntax――日本語と韓国語の談話から――」『朝鮮学報』第217輯、朝鮮学会、2011年10月、50頁

【翻訳】

『한글의 탄생―문자라는 기적』（ハングルの誕生――文字という奇跡）、돌베개、2011年10月、447頁

張 宏波

【著書】

『日本の植民地支配と「熱河宣教」』いのちのことば社　2011年（渡辺祐子、荒井英子との共著。第2章「熱河伝道の『語られ方』――戦争協力という文脈の欠落」（52-80頁）を担当）

【論文】

1. 共著　加害の語りと戦後日本社会（1）「洗脳」言説を超えて：加害認識を伝える：戦犯作家・平野零児の語りを通じて（査読付）『戦争責任研究』（戦争責任資料センター）第72号、2011年6月、48-58頁
2. 共著　加害の語りと戦後日本社会（2）「棄兵」たちの戦後史（上）：「認罪」経験の二つの捉え方（査読付）『戦争責任研究』（戦争責任資料センター）第73号、2011年9月、48-59頁
3. 共著　加害の語りと戦後日本社会（3）「棄兵」たちの戦後史（下）：「加害者」である「被害者」として（査読付）『戦争責任研究』（戦争責任資料センター）第75号、2012年3月、掲載決定

【その他】

1. 震災・原発事故は「戦争」だったのか？－日中間の戦後史に学ぶ者として『世界へ未来へ　9条連ニュース』（憲法9条－世界へ未来へ　連絡会）No.198、2011年6月20日、1頁
2. 2010年度プロジェクト中間報告　東アジアにおける「和解」の模索『PRIME』（明治学院大学国際平和研究所）34号、2011年10月、123-125頁
3. 執筆協力：宮岸雄介「入門編　これでわかる！　はじめての中国語」『NHKラジオ　アンコールまいにち中国語』（2011年度後期）、NHK出版、2011年

寄川 条路

【編著】

『若者の未来をひらく――教養と教育』角川学芸出版、2011年12月、全208頁。

普遍的「知」は存在するのか。本書は、さまざまな分野の若手研究者が、学際的視点で教養という「知」の未来を探り、時代を超えた教養のありようを検証する。その検証を通して、今の時代にふさわしい教養のあり方、将来にわたってあるべき教養の姿を模索、提示した意欲作である。

『新しい時代をひらく――教養と社会』角川学芸出版、2011年12月、全208頁。

教養という理念にどのような社会的意義を取り戻すことができるのか。本書は、新進気鋭の研究者が、学際的視点で教養という「知」の意味を探り、教養の社会的意義を真摯に検証する。教養という知のあり方の意味するものは？　永遠の命題を、哲学・政治・宗教・芸術などの思想文化へ引き戻して、社会のなかで教養のあり方を問う。

渡辺 祐子

【著作】

『日本の植民地支配と「熱河宣教」』いのちのことば社、2011年（張宏波、荒井英子との共著。第1章「満州プロテスタント史から見た東亜伝道会と熱河宣教」（19-51頁）を担当）

【翻訳】

『「牛鬼蛇神を一掃せよ」と文化大革命――制度・文化・宗教・知識人――』三元社、2012年（王力雄著　石剛らとの共訳。第4章「チベット問題に関する文化的思考」、第5章「チベット仏教の社会的機能とその壊滅」を担当）

【講演】

「満州プロテスタント伝道の記憶と戦後日本の教会」2012年2月17日　於西南学院大学

【その他】

書評　立教学院史資料センター編『The Spirit of Missions 立教関係記事集成〈抄訳付〉第三巻（1904－1914）』（立教学院、2011年）

『立教学院史研究』第8号、立教学院史資料センター、2012年3月（予定）

『明治時代史大辞典』全4巻、吉川弘文館、2011年～

（「擬泰西人上書」、William Campbell、William Alexander Parsons Martin の3項目を担当）

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報
SYNTHESIS 2011

2012年3月31日

編集代表　大森　洋子、石渡　周二
発 行 者　石渡　周二
挿　　画　土方　淳代
発　　行　明治学院大学 教養教育センター付属研究所
〒244-8539　横浜市戸塚区上倉田町1518
電話045-863-2067
印　　刷　株式会社野毛印刷社

SYNTHESIS 2011

シンセシス

明治学院大学 教養教育センター付属研究所年報